登山家

大久保由美子さん

Yumiko Okubo

「からっぽ」の時間があるから山が好きなんです

山岳小説をきっかけに、OLから一転、本格的な登山に目覚めた大久保由美子さん。
わずか5年で日本人女性として4人目となるヒマラヤへの無酸素登頂に成功。
突き動かされるように行動し変化する大久保さんに山の魅力を聞きました。

Profile

おおくぼ・ゆみこ◎1968年山口県生まれ。青山学院大学経営学部を卒業。大手投資会社に在職中、登山を始め、97年、日本女性で4人目となる無酸素でヒマラヤのパキスタン・ガッシャーブルム II 峰（8,035m）に登頂成功。その後早稲田大学大学院で心理学を学ぶ。神奈川県藤沢市在住。山登りのきっかけがない女性のためのサークル「からっぽクラブ」を運営。
HP「からっぽの魔法」
http://www.climberv.com。

――山に関心を持ったきっかけが『銀嶺の人』という山岳小説。

入社1年目の冬だったのですが、滑り止めで入った会社だったので、現状に満足できていなくて…。なんとなく、山の本が読みたいなと思ったんです。読み進めていくうちに自然現象の描写や主人公の女性登山家に憧れて、「コレだ！」と。

――それまで全く山の経験はなかったのですよね。

当時はヒールの靴を履いて、服はボディコン系。大学時代の友人はその後の転身ぶりにびっくりしていました。

――どうやって経験を積んだのですか？

最初は本しかないですね。いちばん最初にチャレンジしたのが、鉄道会社が主催したスタンプラリーで、42・195キロハイキング。20キロぐらいで足ががくがくして、それ以上歩けなくなりました。そこから、日帰り登山で距離を伸ばしていって、次に山小屋に泊まって、道具をひとつずつ集めて、テントを買って…。

◎このページのトップへ

――そこでさらにステップアップ？

雪や岩になると道具も違うし、技術的にも難しくなるので、山岳会に入りました。トレーニングはもっぱら現場の山。余分な筋肉をつけると重くなって山登りには邪魔になってしまうので、登るときに必要な腿の前、降りるときのふくらはぎ、ザックを担ぐのに腹筋と背筋。実践で、使う筋肉だけを鍛えます。

普段歩くところは人間がつくったものだから平らじゃないですか。でも山に平らなところはどこにもない。岩があったり木があったり…。だから足裏の感覚が鋭敏になって、靴を履いていても地面を直に歩いているかのような感じになるんです。五感って無限の可能性があって、昔は、それを大いに発揮して生きていたと思うんですけど、快適な都会生活ではその必要がない。でも使わないとどっか病んでくると思うんですよね。

例えば、テントに夜いるのは恐いんです。太刀打ちできない動物がきたらどうしようとか。すると音や匂いにすごい敏感になる。私たちが快適な生活になってからまだ歴史が浅いから、自然の中にいると、使っていない細胞が総動員されて、体を使っていた頃の奥の記憶が呼び覚まされる。それがすごく気持ちいいんです。

明日死んでも
後悔しない
生き方がしたい

――どんどん本格的になりますね。

それでも、仕事をして週末は山に行って癒される、みたいな感じで、それ以上のことは考えていなかったんです。でもあるとき、所属していた山岳会の同期の男性二人が雪崩に巻き込まれて亡くなった。ちょっと前まで話をして、あれこれ約束もしていたのに。自分は心のどっかで、80歳くらいまで生きるような気がしていたんですね。でも山に限らず、いつ死ぬかわからないんだっていうことが身に迫ってわかった瞬間、待遇がいいから生活のため、みたいな感じでいるこの会社にはもういられないなと思ったんです。明日死んでも後悔しないような生き方をしたいなと。

――それでヒマラヤへ？

まずやったことは、パスポート取得。海外の自然のあるところでゆっくり自分と向き合いたいなと思ったんです。すると、間髪入れずに、ヒマラヤ登山隊のベースキャンプマネージャーをやらないかという話が来まして。

――友人を失った"山"。怖さはなかったですか？

もちろん、ありました。異常に雪質を気にしたり、臆病になってて。それを指摘もされて。でも、山をやめようとは思わなかったですね。

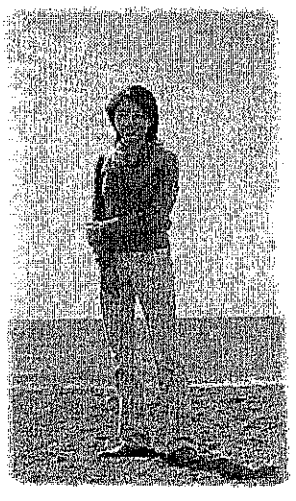
――そして、雪山歴2年にしてヒマラヤの8000m峰に無酸素で成功された。

調子も天気も良かったし、万事うまくいったから登頂できたという感じです。頂上に着いたときは、生まれて初めてうれし涙を流しました。でも山から降りて思い出すのは登頂のシーンではなく、頂上を目前に登っている最中。どうしてだろうと考えてみると、そのときはいちばん無心になっている瞬間なんです。自分がなくなっているから、いっぱいの景色が頭に入っていて、それを思い出すんだろうなと思ったんです。そして、そういう"からっぽ"な瞬間がいちばん自分が求めていたものだと気付いたんですね。だから自分は山が好きなんだって。

――それが"からっぽの魔法"？

そうですね。すごく集中している時間だと思うんですけど、自意識がなくなって、いろいろ悩んでいたことや鬱屈していたことが解決してしまったみたいな気持ちになれるんですよね。その時間のおかげでいきいきと暮らせることがわかったから「魔法」だなと思って。山登りに限らず、ひとそれぞれに合うそういう時間があるのだろうなと思います。

――ヒマラヤのように高い山に登ると、肉体はどうなっているのですか？



たぶん、交感神経が優位で、アドレナリンが出まくっている状態だと思います。ちょっとぐらいのケガは気付かないし、食欲もなくなるし、五感もびしばし働いている。ただ、あまりそうなりすぎると危険。緊張とリラックスの間ぐらいがいちばんいいですね。さっきの"からっぽ"のときは肉体もいい状態。そこに入ると、体の苦しみも痛みもない。

――人間の体は不思議ですね。

筋肉がどうこうというより、いかに薄い酸素に体を慣れさせるかということがいちばんのポイントですね。うまくいかないと楽しくないし、下手すると死んでしまう。２００１年のマナスルは難しい山で人には評価されましたけど、いっぱいいっぱいで、自分ではいい登山ではなかったです。

――乳ガンがわかって手術後の登頂でしたよね。

友人の死もショックだったけど、自分がもしかしたら死ぬかも知れない病気にかかったということは、リアルに自分の人生がいつ終わるかわからないということをつきつけられた。そのときの登山は結果的に大変だったけど、2カ月の遠征中、いろいろ考えることができました。

――2度目の人生の大きなポイント。

病気をきっかけに、人の評価や期待に追い込まれる気持ちになることがなくなりました。他人の価値に振り回されて無理な登山で死んだらほんとうにつまらない。

でも、いちばん大きいのは、子どものことです。病気になったとき、抗ガン剤を飲んでいる3年間は子どもをつくらないでくださいと言われたんです。そのときショックで、ショックをうけた自分にびっくりしました。

ヒマラヤの魅力ってすごくて、毎年行きたくなるんですよ。でも体に悪いから、ヒマラヤに取り憑かれている間は子どもはつくれないなと思っていたんです。それが病気のおかげで、優先順位は子どもが先になった。誰に遅れるでもないし、また子どもと登ったり、育ったら復帰すればいいと力が抜けたんです。

――お子さん、8カ月ぐらいでしたよね。3度目の人生のポイント？

育児に夢中で、今のことしか考えられないですけど、意識的に思っているのは、自然から学んだことを伝えていくこと。

――それはどんなことですか？

快適に暮らしている"ここ"がすべてではない。大きい地球のほんの一部で、全体に影響を与えあっていることや、自分たちは生きものの、危険なこと、緊張しなければいけない場面もあるし、癒しの場面もあること。そんな感覚です。

――子連れ登山ももうすぐ？

山登りのきっかけがない女性のために「からっぽクラブ」というサークルをつくっているのですが、その中で、ママさんとのイベントもやろうと思っています。癒し系もですが、ちょっと頑張る登山も早くしたいですね。